



特集

記憶を育む／記憶と向き合う——子どもの
ことばの実践を捉え直す

緒言

川上 郁雄

© 2025. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

今号の特集のテーマは「記憶を育む／記憶と向き合う」であった。複数言語環境で育つ子どもを主題とする本誌で記憶をテーマにすることに違和感を抱いた方も多かったかもしれない。ただし、テーマの副題に「子どものことばの実践を捉え直す」とあるように、本誌の既刊号の特集につながるテーマでもあった。例えば、第13号は複数言語環境において「子どもの「ことばの実践」を考える」、第14号は「「子どものことば」を育むとは——親子の視点から」、第15号は「複数言語環境で成長する子どもたちはどのように言語と向き合い、生きようとしているのか」であった。今号の特集も、これらの既刊号のテーマと同じ線上に位置づいている。

本特集でなぜ記憶をテーマにしたかについて、改めて説明しておこう。

子どもは生まれた時から、親の目線や呼びかけ、動作、食などのさまざまな刺激を受けながら成長する。子どもがその刺激を五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）で受け止め、その場のことばの意味を類推（abduction）することで言語習得が進むと、認知科学では言われている。

つまり、子どもの言語習得は、昨日の記憶をもとに目の前の状況を考え、試行錯誤から意味を類推し、更新する作業と言える。その作業は、親や周りの人との協働作業であり、かつ、ことばによるやりとりがともなう。そして、ことばの意味を類推する力はことばで考える力につながる。

単数言語環境で成長する子どもがこのような過程を経て言語習得を進めると考えると、複数言語環境で成長する子どもは、さらに多くの刺激を受け、記憶を更新し、より多くの試行錯誤の中で複数言語習得を進めていると考えられる。

その経験と記憶は、子どもの振る舞いや成長、人格形成に影響していく。複数言語環境で成長する子どもにとっての記憶は、親や子どもの周りの多様な他者との多様な言語によるやりとり、つまり「ことばの実践」から形成される。

この記憶は、幼少期に限らない。成長期における心身の成長、他者のまなざし、多様な言語によるやりとりが新たな記憶を形成していき、その記憶の意味づけも成長や環境によって変化していく。さらに、成人後、自らの生き方や将来の生活を考えるとき、幼少期からの記憶とことばのやりとりが大きく関わることもあるだろう。

このように考えると、幼少期からの記憶は人生全体に関わり、その記憶の形成や意味づけにはことばのやりとりが深く関わるのが想定される。そこで、本特集では、複数言語環境で成長する子ども・成長した成人を含め、記憶を育む／記憶と向き合うという視点から「ことばの教育実践」、「ことばの学びと記憶の関係」を捉え直してみたいと考えた。以上が本特集の趣旨である。

この特集に、多数の論考等が投稿された。その論考等は、本誌編集委員会で公正かつ厳正に審査された結果、「研究ノート」が1本、「書評」が1本、「エッセイ」が4本選ばれ、ラインアップが組まれた。「研究論文」が含まれなかったのは残念だったが、複数言語環境で育つ子どもの研究において、記憶をテーマにした先行研究がまだ十分に蓄積されていない現状やそのテーマで研究を行う方法論がまだ開発されていないことの反映かもしれない。しかし、この特集に多くの投稿者がいたように、記憶に関心や思いを寄せる研究者や実践者がいることも確かであろう。

改めて特集の6本の論考等を見ると、複数言語環境における子どものことばの実践と記憶、幼少期の移動と複数言語にまつわる記憶、その記憶が人生の軌跡に与えた影響、記憶から創作活動へ、さらに食と追善法要まで、複数言語環境で成長する当事者の生活世界に記憶が深く関わることがわかる。つまり、複数言語環境に生きる子どもの成長、ことばの教育、人生全体における複数言語の使用／不使用の記憶が継続し、再構成され、意味づけられていく。したがって、本誌の研究主題の子どもの理解と実践において記憶は欠かせない視点を提供するだろう。

本特集が「移動する子ども」や「移動する家族」に関心を持つ方々や現在子どもたちの「ことばの実践」に関わる方々の参考になれば幸いである。

(編集委員会委員長)